

優秀賞

苦しい日々を乗りこえて

福井県 越前市武生第一中学校一年 三宅道

ぼくの心臓は、確かに動いている。動脈が心臓から血液を元気よく送り出している。静脈は、体のいろいろな部分から血液を集めて心臓に確実に送っている。ぼくは生きている。でも、夏休み前のぼくとは違う。ぼくの心臓には、一本のバイパスがつけられたのだ。

ぼくは四才の時、川崎病になり入院した。この川崎病というのは、原因不明の難解な病気だ。治療する薬は開発されているので、病気は完治する。しかし、百人中一人ぐらいの割合で、冠状動脈に瘤ができる後遺症が残る。ぼくはその一人だった。ぼくは、毎朝必ずアスピリンを服薬していた。それは血を固まらせないための薬だ。そして、運動管理表というものをもらって、いろいろな運動を制限された。マラソン、縄跳び、水泳……激しい運動は、できなかった。でも、ぼくは、隠れてやることがあった。大好きなサッカーは、毎日のようにやっていた。休み時間は、ドッジボールをするのが楽しみだった。でも、家へ帰って急に心臓が痛くなるときがあつて、激しい運動はしてはいけないのかなと思つた。

中学生になり、心臓カテーテル検査を受けた。これは足の血管から細い管を心臓の血管まで入れて、血圧や動脈血と静脈血の混じりぐあいを調べたものである。その時、これまで考えられていなかった、新しいバイパス路をつくる手術が可能になった。それを聞いて家族はとても喜んだ。しかし、ぼくは素直に喜ばなかった。その手術は、成功率が九十五パーセントと聞いたからだ。危険の伴う手術のことをもっとくわしく知りたくて、主治医から説明を聞いた。人工心臓や合併症の話や聞くと、さらに不安がつつた。しかし家族に励まされ、看護師さんに勇気づけられ、ぼくは手術

室に入った。

ぼくは集中治療室で目をさました。手術は、終わっていた。手術は、長びいて五時間かかった。全身麻酔が切れて、我慢できないほど痛くて暴れた。あまりにも暴れるので、手足をベッドにテーピングされた。意識はなく四日間は何も飲むことも食べることもできなかった。かすかに生きていく感じはした。

病室に戻つてからも、何度も何度もナースコールを押した。つらくて死にそうだった。

「日に日に良くなるから、我慢するんだよ。」と、看護師さんに言われた。祖父母、父母、兄は毎日変わる変わるぼくのそばにいて、ぼくの回復を見守ってくれた。そのおかげで、「生きるんだ。元気になって退院したい」と、ぼくは思うようになり、痛みを我慢して起き上がったたり歩いたり、自分でトイレに行ったりして頑張った。元気になつて思いっきり運動をする自分を想像して頑張った。

新しいバイパスをつけた心臓が確かに動いているように、これからぼくは力強く生きていきたい。できなかったこともできるんだという可能性を信じて努力していきたい。

